

## 22世紀への伝言論（人生学 第15回）

高 橋 清 隆

### はじめに

まだ、小林正觀さんの本が店頭で売られていなかった頃、私は意を決して、正觀さんの本を注文しました。

今から考えれば笑い話ですが、正觀さんのことや弘園社のこともよく知らず、仮に良くない宗教関係のところだったら、一度注文したら、次から次へといろいろなものを買えという知らせが来るのではないかと考え、注文するまでに、私としては相当時間がかかったことを覚えています。

それがその後、正觀さんの本を書店で見かけることが多くなり、今では、小さな書店でも置くようになり、時代の流れを感じました。

今回扱うのは、正觀さんの初めての著作と考えられる『22世紀への伝言』です。1996年2月18日に、「未来の智恵」シリーズ1として、弘園社から出たものです。

2014年11月9日に、廣済堂出版から、それを編集し直した『22世紀への伝言 もうひとつの幸せに出会う』が出版されました。章立てや順序が変わり、また、文章にも修正が施された部分もあり、だいぶ印象が異なります。

ここでは、もとの弘園社版によって論じますが、弘園社版は書店では売られていないので、廣済堂出版の方も対照することにしたいと思います。

### 1 改訂の一例

1996年版と2014年版の『22世紀への伝言』は、構成もかなり変えられています。また、文章も細かいところまで直されています。

象徴的なのが、弘園社社長の坂本道雄さんの言葉です。1996年版では「はじめに」として、冒頭に置かれていますが、2014年版では「あとがきに代えて」として、小林正觀さんの「あとがき」の直前に置かれています。1996年版が奥付を含めて240ページだったのに対して、2014年版が280ページになっているのは、内容を増補したためではなく、ゆったり組んで、読みやすいように段落も増やしてあるからです。

さて、それぞれの冒頭部を比べてみます。

#### 1996年版「はじめに」

言うことが二転三転してなかなか問題が片付かない、そういう人がいて、頭をかかえているとき

でした。「その方の長所を教えてくれませんか…。」私と小林正觀さんとの出会いはこの言葉が始まりがありました。一九九三年四月に日本一のユースホステルを経営している松山の平野さんのところで仲間の集まりがあり、そこに偶然小林さんが宿泊していました。以前から平野さんに「この人は宇宙人かも」と聞いておりましたので仙人のような人を想像しておりましたが、全くの「普通」の人で、拍子抜けしたことを覚えております。

当時私は仕事のパートナーとしてその人と組むか頭を悩ましておりましたので、その相談をしたところ冒頭のような返事が帰って来たのです。（3ページ）

2014年版「あとがきに代えて」

「その方の長所を教えてくれませんか」

私と小林正觀さんとの出会いは、この言葉がはじまりでした。

一九九三年四月、愛媛県にある当時日本一のユースホステルに仲間たちと集まったとき、偶然、小林さんが宿泊していました。

私はその宿の経営者の方から、以前より「あの人は宇宙人かも」と聞いておりましたので、仙人のような人を想像しておりましたが、まったく普通の人で、拍子抜けしたことを覚えております。

当時、私は仕事のパートナーとして、ある人と組むかどうかを悩んでいました。その人は言うことが二転三転するので問題が片づかず、私は頭をかかえていたのです。そういう相談をしたところ、冒頭の返事が返ってきたのです。（273ページ）

このように、込められている内容はほとんど変わっていませんが、文章の順序を変えることにより、印象はだいぶ変わることがわかります。そして、1996年版にはあった「平野さん」という名前を削り、「始まりがありました」を「はじまりでした」と変えるなど、表記や表現をよりわかりやすくなるように工夫されているのがわかります。

そして、「はじめに」を「あとがきに代えて」と配置を変えたところがやはり大きいと思います。こうした組み換えは、小林正觀さんの文章にも及んでいるので、1996年版を持っていても、不注意な人は、別の内容かと思ってしまうかもしれません。

## 2 改訂の全貌

全節では、1996年版の「はじめに」と、それを改訂した「あとがきに代えて」を見てみました。

ただし、一部分だけ見たのでは、全体の傾向を見失う可能性があります。

そこで、両版を徹底的に比べてみることにしました。

章や節の題の前の数字は、それぞれの本のページ数です。

★印は、1996年版にはあった内容を、2014年版では削除したものです。

2014年版の「☆順変更」は、1996年版と内容は変わっていないものの、文章の順序を明らかに入

れ換えたものをあらわします。

2014年版の章の副題は省略しました。

1996年版	2014年版
3～ 4 はじめに	273～275 あとがきに代えて
第1章 人間の能力	第2章 人間の神秘（副題略）
10～ 14 潜在能力 ★10ページ11、12行火事場欠	70～ 75 宇宙の意思是すべて平等、すべての人が選ばれた人
14～ 18 ユングの心理学	76～ 81 眠りの中で宇宙と交信している
19～ 23 誰でも超能力者	82～ 87 「一〇〇〇」という数字にこめられた不思議
23～ 26 隠れた能力を発見	88～ 89 体内にあるコンピュータを作動させる
※かんの虫 ★26ページ 6～13前屈欠	※第4章 177～178 イライラを体から追い出す方法
27～ 29 人間の喜び三つ	※ 3～ 6 まえがきに代わり 人間の三つの喜び
29～ 32 六つの精神レベル	※第3章 116～119 敵意が愛情に変わる「肯定的な見方」
32～ 35 Oリング	90～ 93 嬉しいこと、いやなことは体の反応が教えてくれる（☆順変更）
35～ 37 風邪をひかない人	※第4章 152～154 風邪をひかない体になる
第2章 因果関係論	第1章 宇宙の法則（副題略）
40～ 42 織田信長と私の関係	14～ 16 「私は奇跡の存在」だと知る
43～ 47 大学の研究会 ★45ページ14行神社のトップ欠	17～ 21 人間って不思議に満ちている！
★46ページ 3行から47ページ1行 AOAアオバ欠	
47～ 50 高橋信次さんのこと ★48ページ10～12行八起ビル欠	22～ 26 すべてを諦めて悟った人
51～ 53 名前のこと	27～ 29 名前がご縁を引き寄せる
53～ 56 遭難体験	30～ 34 未知なる存在を確信した祈り
56～ 61 いいことしか起こらない	35～ 41 「不幸は存在しない」と教えてくれた人生
62～ 65 ドミノ倒し	42～ 45 すべては縁で結ばれている
第3章 宇宙の摂理	(第1章のつづき)
68～ 72 向こうの世界	46～ 50 出会う人と「約束」をして生まれてきた

1996年版	2014年版
★69ページ 6～15行三輪山欠	
★70ページ 1～6行具体例欠	
★71ページ14、15行丹波哲郎欠	
72～76 人生は自分が描いた設計図	51～54 どんな人も私にとってありがたい人
★75ページ1行～76ページ3行 「傷つく」総量欠	
76～79 プラトンの想起説	59～60ページ1行 数字と言葉に隠された秘密
79～82 宇宙唯一の法則	55～58 この世は「向こうの世界」の影
★80ページ2～6行天才欠	63～65 投げかけたものが、返ってくる
82～84 五つの周期	66～67 投げかけたものが返ってくる五つの周期
★83ページ10行～84ページ4行 シグマ欠	
84～85 数字の情報	60ページ2行～61ページ9行 (「数字と言葉に隠された秘密」のつづき)
86～87 言葉の力	61ページ10行～62 (「数字と言葉に隠された秘密」のつづき)
★ 87～89 原子の世界欠	
第4章 潜在能力開発と実践	(第2章のつづき)
92～94 スプーン曲げの意義	94～96 スプーンを曲げられる精神状態で暮らす
94～98 スプーン曲げの方法	96～100 (「スプーンを曲げられる精神状態で暮らす」のつづき)
98～101 手の力と手当て	101～105 右手の力—「気」の力で体の不調も改善できる (☆順変更)
102～104 気力=念の力	111～114 投げかけたメッセージは必ず伝わる
105～108 左手はアンテナ	106～110 左手の力—体からの声を受け取る
★108～110 天気予知の方法欠	
111～113 チャクラを開く	※第4章155～157 呼吸でチャクラを開く (☆順変更)
★112ページ3～10行第一段階欠	
★114～115 雲消しの術欠	

1996年版	2014年版
第5章 二二世紀への伝言 118~120 22世紀への視点 120~124 インドのサイババ ★120ページ15行~121ページ3行 サイババ経歴欠 124~127 22世紀は来るか	第6章 22世紀への伝言（副題略） 230~233 二二世紀への視点 234~238 「博愛型社会」が次の時代をつくる
127~131 パワーの源 131~133 渦の原理 ★133ページ10~15行右回し欠 134~135 心の健康 135~138 ヒーリング ★138ページ2~12行うたおし欠 138~142 鬱病治療 ★142ページ11~13行動植物欠	239~241 二二世紀は来るか 以下、第4章 健康の法則（副題略） 158~163 自然のパワーで充電する 164~166 プラスのパワーを呼び込む「渦」の原理 167~168 憎みを感謝に変える心の三段階 169~171 日本の伝統に健康へのヒントがある 172~176 自分は必要とされていることを知る
第6章 楽に生きる方法 144~147 我慢 147~149 『雑用』という仕事 150~152 災難に遭わぬ方法 153~156 病気に感謝 157~160 自分で自分を好きになる ★160ページ9~12行自分が欠 160~163 若さの秘密 163~166 幸せメガネ 167~170 宇宙現象 ★170ページ8、9行千利休欠 170~174 厄年など ★170ページ13行~171ページ1行 魔除け欠	第5章 楽に生きる法則（副題略） 192~196 「種をまく人生」は、悩みから解放された人生 197~200 すべての仕事は、人と自分を幸せにしている 201~204 災難にあわない方法 205~208 病気に感謝できる心 209~212 人から評価されないことをすると、自分のことが好きになる（☆順変更） 213~215 眉間にしわを寄せない生活が、若さの秘訣 216~219 「幸せメガネ」は肯定する心から生まれる 220~223 目の前の出来事は、すべて宇宙現象 224~228 影を光に変える「おはらい」とは

1996年版	2014年版
第7章 天使のプール 176～177 「美しい」人	第3章 幸せの法則（副題略） 120～122 「美しい人」の本質は、人のためにどう動くか ということ
178～179 誕生日祝い	123～125 誕生日をお祝いする本当の意味
180～182 二つの死	126～128 「何を残したか」は「何を与えたか」ということ
182～185 誉めるということ	129～133 誉めるということ
185～188 結果想定せず	134～137 「結果」を想定すると、つらく厳しくなる
189～191 「かがみ」の原理	138～139 悩みや苦しみから解放される「かがみ」の法則
191～193 菜食	※第4章 179～182 「菜食」で宇宙のエネルギーを効率よく取り入れる
194～197 医食同源 ★196ページ3行～197ページ SOD・AOA欠	※第4章 183～185 医食同源 (第3章にもどる)
198～200 天使のプール	143～146 ひらめきを引き寄せる天使のプール
200～203 「今」を考える「心」 ★202ページ15行～203ページ1行 一生懸命欠	140～142 念を入れて生きる
203～206 ジッセンジャー ★205ページ2～8行集まり欠	147～150 「伝える人」ではなく「実践する人」になる
第8章 さまざまな示唆 208～210 人格の三要素 ★208ページ4行～209ページ6行 アイドル欠、210ページ表欠	第6章 22世紀への伝言（副題略） 242～243 人格の三要素
210～213 明るさ	244～246 人が集まる「光の存在」になる
213～216 刺し言葉	247～250 「なるほど」「そうね」で始まる会話、「でも」 や「だって」でとぎれる言葉
216～218 窮すれば	251～254 「どう変えるか」ではなく「どう変わるか」
219～223 脳波 ★221ページの表欠（文章化）	※第4章 186～189 心と体に密接に関係している脳波とは (第6章にもどる)
223～227 三角形の原理 ★224ページ15行～225ページ1行	255～259 理想の人から好かれる「三角形」の原理

1996年版	2014年版
人格者欠	
227～231 肯定的な目	260～265 肯定的な見方が、感動の人生をつくる
231～236 キャーの遺伝	266～272 一〇〇〇年後の意識をつくる私たち
237～238 あとがき	276～278 あとがき

### 3 削除した内容

1996年版と2014年版の大きな傾向の違いはいくつかありますが、1996年版では、章変わりは新たなページから始めているものの、全体の長さを節約するためか、節は行をあけただけであるのに対して、2014年版では、節の変わり目はページを変えているのみならず、節の題も、両版、ごく一部に同じもの、ほとんど同じものがありますが、他はすべて長くしています。中には極端に長いものも散見されます。

そして、もっとも重要なことは、1996年版にあったもので削除したものはあっても、基本的な要素で、2014年版で付け加えたものはないということです。

2014年版は、1996年版より、全体として40ページほど増えているのですが、節ごとにページを変えている他に、文章も改行を多くして、より読みやすくしてあります。

そのため、内容は一切増やしていないのにもかかわらず、40ページも増えています。

さて、1996年版に親しんだ者として、どういう内容を削除したかは興味が湧くところです。

前節に掲げた表で★の印をつけたものがそれに当たります。

1996年版は持っていない人が多いと思うので、具体的に傾向ごとに見ていきたいと思います。その傾向は、次の3点になるように思われます。

- 1 固有名詞や紹介を削除する。
- 2 具体的な挿話を削除する。
- 3 内容に不備があるもの、根拠不足のものを削除する。

まず「1」について。1996年版の第2章に中西教授のことが出てきますが、45ページの14行「日本の神社のトップで中西教授を知らない人は居ない、と言われるほどの方です。」の1文が2014年版では削除されています。中西旭教授は2005年に亡くなっているためか、あるいは、こうした権威づけは不要と考えたか、という理由からと推測されます。同じく第2章の46ページに「AOA アオバ」という会社にことについて書かれていますが、それは2014年版では削除されています。第7章にも、SOD様食品を出しているその会社について紹介されています（196、197ページ）が、同様に削除されています。

第2章では、「高橋信次さん」について触れられますが、48ページの「地下鉄・都営浅草駅の駅ビルは「八起ビル」といい、高橋信次さんが三〇歳前に借金なしで建てたもの。「七転び、八起き」

からつけた名だとか。／当時すでに特許が数百あり、お金がたくさん入ってきたのだそうです。」は削除されています。ここから、中西教授の削除した記述も合わせて考えると、自分のことではないといえ、誇るような内容は不適当と考えたのではないでどうか。

1996年版の第3章で、生まれ変わりの間隔が平均して四〇〇年だと述べているところで、「死んですぐの人もいるらしく、丹波哲郎氏は一二〇年説ですが」は削除されています。生まれ変わりの間隔は、削除された中にるように、死んですぐの場合もあるようで、実際は、平均値はあまり意味をなさないように思われます。それぞれの人の必要性による間隔が主体です。

第5章のサイハバの簡単な経歴を削除したのは、特に説明不要と考えたからだと思われますが、第6章の170ページ「千利休が唱えた茶道も、『一杯の温かいお茶を飲める幸せ、その幸せを全身全霊で味わおう』ということではなかったのでしょうか。」が削除されているのは、少し考えさせられます。千利休の考え方や人物像については、様々な見方があり、また茶道そのものに対しても、あまりに型に囚われていると思う向きもあります。正観さんがどのように考えたかは確かめることはできませんが、考え直して、この一文を削除したことは確かです。

先に傾向として分類した「2」「3」にもかかってくることですが、このような具体的な挿話は、内容をわかりやすくしますが、時代が変わることにより、話の流れにそぐわなくなることもありますし、話の内容をある程度普遍化するためには、逆効果の場合もあります。

1996年版から削除した中では、正観さんが交流した相手の話、第3章69ページの、三輪山を登っていた時に涙が止まらなくなった五〇歳代半ばの人の話や、同じく第3章80ページの「天才」についての聴衆の反応、第7章205ページにある、正観さんの「じっせんしゃ」という言葉を「ジッセンジャー」に聞き違えた聴衆の話、第8章208、209ページにある、正観さんの友人の俳優のアイドルについての話などは、正観さん自身が体験、確認したことではないので、削除したようです。

また、第3章83、84ページのシグマの話や、87ページ以下の「原子の世界」の節まるまるは、話がやや理系的になると判断したためか削除されています。

そして、今回もっとも注目したのが、「3」の傾向に当たるものです。

#### 4 削除の意義

『22世紀への伝言』は、小林正観さんの初めての著作になるようです。そして、そこには、その後の正観さんの著作に記されることになる基礎が詰まっています。

けれども、1996年版から2014年版へと改訂する時に削除されたことは、その後の著作でも、あまり取り上げてはいません。

典型的な例をいくつか見てみましょう。

1996年版の第4章の「天気予知の方法」と「雲消しの術」の両節は、完全に削除されています。「天気予知の方法」は、超能力的ではなく、あくまでも、自分の体や体感によるもので、具体的には、唾を飲み込んだ時、耳がズキンと鳴るかどうかによる判断などなのですが、天気予報に頼らず

に、自分の感覚を磨こうということに主旨があるように思えます。

また、「雲消しの術」は、その節の冒頭に「潜在能力が誰にも隠れていることを目で確認する方法があります。空に浮かんでいる雲を消してみるのです。」(114ページ) とあるように、超能力的な傾向のある話です。

ただ、別の本で正觀さんが書いているように、鉱物、植物、動物に生まれ変わった後、空の雲になってから、人間に生まれ変わらるのだそうです。それならば、人が勝手に空の雲を消してしまうのは、あまり好ましくないことになります。

また、スプーン曲げについては、2014年版に残していますが、これは正觀さんらしからぬことです。使えなくなったスプーンを使えるようにするのならともかく、能力を磨くためとはいえ、使えるスプーンを使えなくするのは、あたたかくないことです。能力を磨く方法は、他にいくらでもあるはずです。

また、1996年版にはあったのに、2014年版で削除した内容に、第3章75、76ページの傷つく総量の話があります。

これは、内容に不備があったために削除したのではないかでしょうか。その内容は、次の部分に集約されています。

「耐える」「我慢する」ことに小さいころから慣れてきた人間は『強い』のです。大人になっても傷つきにくい。逆に、小さいころ「訓練」が少なかった人は、大人になって傷つきやすい。どちらの場合も、人生のなかで「傷つく」総量は変わりません。(75ページ)

確かに、順調に進んできた人は、逆境に弱い傾向はあると思います。その意味においては、この内容は間違っていませんが、「傷つく」総量は、人によってかなり多い人もいるのは事実です。ある程度傷ついたら、人は傷つかなくなるのではなく、一生傷つきっぱなしの人もいます。それは、傷つくのは、自分の基準によるためです。それについては、これまでに何度も取り上げましたが、この宇宙には、ほんとうは基準などないにもかかわらず、勝手に基準をたくさん作ったり、基準が厳しすぎたりして、自分を裁いてばかりいる人が意外に多いのです。

それに正觀さんが気づかないはずではなく、この部分を削除したのではないかと考えられます。

## 5 潜在能力

以上のように、1996年版を、より普遍化し、不備のあるものを削除し、理屈のわからない超能力的な話は、その後の著作では、少なくなるように思います。

私の場合は、1996年版の『22世紀への伝言』から、小林正觀さんの著作を読み始めたため、超能力的な話の多い人だという印象があったのですが、その後、そういう傾向は薄まっていったように思います。

もっとも、実質的な初めての著作である1996年版『22世紀への伝言』の主題は、しっかり読んでいくと、超能力的な話やオカルト的なことではありません。

2014年版は、小林正觀の没後（2011年10月12日永眠）に出版されたものであるためか、第1章「宇宙の法則」は、小林正觀さんの大学時代のことを中心に、先祖の話や、トラベルライターになってからのことなど、自身のことから書き起こされていますが、1996年版では、その部分は、第2章と第3章のはじめの方になっています。

1996年版で第1章になっているのは「人間の能力」です。これは2014年版では、第2章「人間の神秘」として、2番目に置かれています。

1996年版は「潜在能力」「ユングの心理学」「誰でも超能力者」「隠れた能力を発見」「人間の喜び三つ」「六つの精神レベル」というように展開していきます。一見、1996年版は、超能力の開発を奨励しているようですが、そうではなく、霊能や靈感がない状態を基本として、「目の前の現象を『肯定的に見るか』『否定的に見るか』の違いだけ」（1996年版30ページ、2014年版117ページ）と正觀さんは述べています。これは、超能力でも何でもなく、すべての人が変えることのできる、物の見方の問題です。

男女関係について、正觀さんの次の言葉が印象的です。

いくら自分が思っても相手がそれに答えてくれない、同じようには愛情を返してくれない、と苛立っている人がいます。で、相手を恨み、相手を呪う。そう思っている間は、事態が悪くなる一方で、なにひとついい方向には行かない。ところが、「自分はその人を愛している。その人が幸せになってくれるなら、自分はどうでもいい。その人がほかの人を好きなら、その恋愛や結婚を心から祝ってあげよう」と思えたとします。自分中心、自分が最も大事な『愛欲』から、相手中心、相手が大事の『愛情』に移行したわけです。そうすると、『奇跡』が起きる。背中を向けて離れよう、離れようとしていた人が、急にこちらを向き、近寄ってくるのです。

（1996年版31ページ。2014年版のほぼ同内容の箇所は118～119ページ）

正觀さんが一貫して言い続けてきたのは、こうしたことでした。

1996年版の冒頭から読んでいくと、はじめは何となく、霊能や超能力を身に付けるための練習をすることを勧めているにも思えるのですが、読者が導かれるのは、結局、先に引用した、超能力でも何でもないところなのです。

後の著作から見て、不思議な話が比較的多い『22世紀への伝言』の改訂方針を見ても、そのことは端的にあらわされているのでした。

私たちを変えるのは、結局私たち自身の意識、考え方であり、しかも、何か特殊な能力によるのではなく、今あるものを受け入れ、感謝の気持ちを持つことが大切だと、正觀さんは、その著作において、繰り返し述べていくことになります。

そして、その主旨を受け取った人は、私のまわりにも意外にたくさんいるのでした。